

古河出身の篆刻家

生井子華生誕100周年展

古河出身の篆刻家生井子華（1904～1989）は、本名生井（しげの。もきょう）は、五石瓠室（ごせちこしう、じょえん）、字は茂卿、別号には五石瓠室、業を継いでいきましたが、次第に書・篆刻に目が向き26歳で篆刻を志します。そして85歳で亡くなるまで篆刻製作に没頭しま

一徹そして剛毅峻厳である一方、温厚篤実を以て人を大切にしました。古河市の社会活動では、ロータリークラブの会長や商工会議所の副会頭を歴任しています。

昭和16年、「游刃有餘地」を出品した第11回泰東展で篆刻部最高賞を受賞し、印壇にデ



刻字「永受嘉福」

ビューします。古典の風格がある堂々とした作です。日展では昭和22年「心持半偈」、昭和26年「知白守黒」によつて特選を受賞し、印壇で確固たる地歩を築きます。

す。昭和31年には日展の新審査員に

挙げられます。昭和30年代になると古河にて石鼓印社を結成主宰し、昭和46年から自宅にて稽古を開始します。昭和40年代に謙慎書道会の篆刻部のメンバーで謙慎印会を結成する際の発起人として尽力されました。

篆刻90点、書軸8点、書扇面3点、刻字3点、その他20点を展示予定。

した。この度は生誕100年を記念して、代表作となる刻印を展示の中心としながらも、常設展示や過去の特別展で展示してない作品を紹介すべく企画しました。

生井は初め閨野香雲に手ほどきを受け、28歳の時に二世中村蘭臺の門を叩くものの入門を断られ、その紹介で西川寧（当時30歳。後に芸術院会員となる。篆刻美術館で平成14年に特別展示を開催）に師事します。

以後師弟の關係は60年近く続きますが、西川が「印に自分を押し出している点では我が国第一」と評するま